

F-13 現代家族における愛情の構造 — 妻の場合 —

奈良女大家政

星野久

目的 家族研究を大別すると、1-制度的、2-構造機能主義的、3-相互作用及び状況的、4-家族発達のアプローチ等が考げられる。本研究はこれらのうち、3に該当する。研究の最終目標は、現代家族の内部構造を主体とした国際比較、変化の方向づけ等を意図するが、本題では、核家族化の進行過程のなかで、家族機能の維持・安定の基本的因子として、夫婦の愛情、満足、幸福などの構造を分析することに主眼点をあいている。

方法 標本調査とその統計的処理に基づいて分析した。調査スケールはリッカート法、指標の作製はE.W.バージェス、小山・隆等を参考とした。作業仮説は、昭和46・47年に実施した予備調査（福岡市西部団地及び非団地の夫・妻）の結果から選択作製し、昭和49年の本調査（北九州市及び福岡市の団地の妻）でこれらを検証することとした。

結果 総論的仮説としては、1. 愛情の高さと結婚生活の現状認識の程度は、正的・直線的に相関する。2. 愛情の高さと配偶者の性格（欠点）に対する寛容さも同様に相関する。3. 愛情の高さと配偶者への役割期待の程度は、正的・拋物線的に相関する。4. 愛情の中段階層においては、配偶者の性格評価及び役割期待の程度には有意差がなく、結婚生活の現状認識の差によって愛しているか否かが分れると考えられる。5. 幸福は結婚生活の各位相（物質的、精神的、家族関係的、親族・近隣関係的、性的等々）における認識の程度と高度に相関する。これらの外に、各属性（結婚継続年数、年令層、学歴等）による差も検出されており、上の総論的（常識的）愛情構造に加えて、愛情の普遍的特性とがイナミックに析出する。